〔調査概報〕

加曽利南貝塚貝層中発見の炉跡について

― 昭和39年の発掘記録より ―

明治大学学生
庄　司　　克

I

昭和39年8月から始まった加曽利南貝塚の発掘調査は、貝塚の中央部を縦・横断するように設定された東一西・南一北、計六本のトレンチ調査を終了し、平面発掘に入りつつある。馬蹄形貝塚の全面的な発掘調査という、おそらくは日本考古学界はじめての試みと思われるこの意義ある調査に参加した一人として、僭越ながらその調査時の所見から気のついた二〜三の問題を書きとめてみたいと思う。

私はこの調査によってはじめて馬蹄形貝塚に接したわけではない。しかし、かといってこのような大規模調査によって馬蹄形貝塚の内部を見ることは未だかって経験のないことであった。したがって、実際に調査に参加してトレンチの断面に現われたまるで小山のような厚い貝殻の塊を目にした時はいささかびっくりし、さすがは日本一の貝塚であると思ったものである。

数週間にわたる調査期間中、私はおもにトレンチ内の断面計測を担当していたので層のとらえかたについて諸先輩の御教示を受けながら各トレンチ内における層序関係を観察する機会を得た。調査開始当初は、貝塚の広大さに目を奪われて部分的な層序関係をとらえるのにせいいっぱいであったが、調査が進み断面計測の場かずを踏んでゆくうちにある事実に気がついた。

それは、この貝塚を形成している貝層群の堆積状態についての簡単な疑問から始まったのである。私たちが調査前に得た馬蹄形貝塚に関する知識では、その内部は薄い貝層が何枚も重って貝層部を構成しており、それはいかに長期間にわたってこの周辺に人々が住んでいたかを示すものであるとのことであった。ところが実際には、Iトレンチ〜VIトレンチに現われた貝塚の断面は、どこをどうみても、いずれも長い時間を経て広範囲に堆積したような「層状堆積」を示さず、あたかも短時間のうちに貝殻をまとめて捨てたような「ブロック状」や「レンズ状」を呈していたのである。

この傾向は特に貝塚の高まり部分を構成している純貝層や混土貝層に甚だ著しく見られ、以来、私はこのような大型貝塚における「貝層」という語句の使用には多少の疑問を抱くようになった。

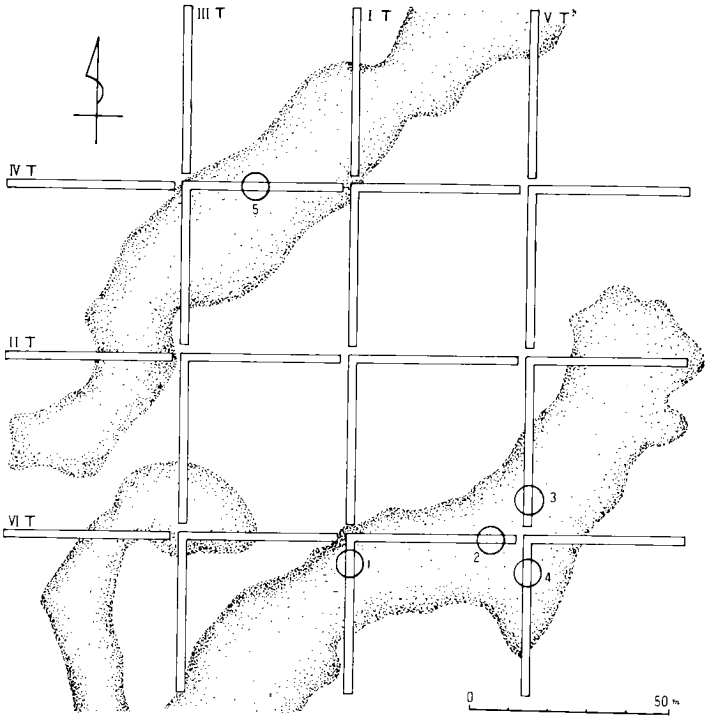
このように、私にとって加曽利南貝塚の発掘調査は今までの貝塚に関する認識をまったく変えてしまうほどの貴重な経験の場となった。そして、あちこちで次々と発見される新しい事実の中で特に私の注意をひいたのは、ここに紹介する貝層中に残された炉跡の発見なのである。加曽利貝塚における炉跡の発見例は数多い。しかし、これらはほとんどの場合、貝層部下層の土層面上から発見されており、火を焚いた場所は焼土となっている。ところが、今回発見された炉跡はまぎれもなく貝層部中に存在し、貝層の上面が焼けただれていた。

一概に貝塚の貝層部といっても、その層状はまちまちである。だいたい貝層自体が土との混合の度合によって、純貝層から混貝土層までいくつかに分類でき、これらが幾重にも積み重なって貝塚を形成している。加曽利南貝塚の場合は、これらの貝層群の間にさらに捨て灰や土層などの間層が複雑に入り込み、同じトレンチ内でさえも僅か2mしか離れていない西壁セクションと東壁セクションの層序がまったく異なった状況を示すということも珍らしくなかった。このため今回の調査では、各トレンチ断面計測時における層序の決定には非常な困難さをきたしたのである。しかし、ごく大まかに各トレンチの断面に現われた層の状態から南貝塚における貝層の流れをとらえると次の如く上・下2つのグループに分けることができる。

まずその1つは、おもに貝塚の高まり部分を構成している「ブロック状」・「レンズ状」堆積を示す純貝層もしくはこれに近い土の混入の少ない貝層群の集まりで、いうまでもなくこれが貝塚の主体部を形成しているわけである。次はこれらの

貝層群の下にあって、貝塚形成の基盤ともなるべきもので地山の上に直接堆積したグループである。これは混土貝層、混貝土層などのわりに土の混入の多い貝層でみな一様に地山に沿って平坦な堆積状態を示している。問題の炉跡は、いずれもこの平坦な堆積を呈する貝層グループの上部付近から発見されている。

次に具体例をあげてみよう。



第１図　加曽利南貝塚貝層中発見の炉跡分布図

Ⅱ

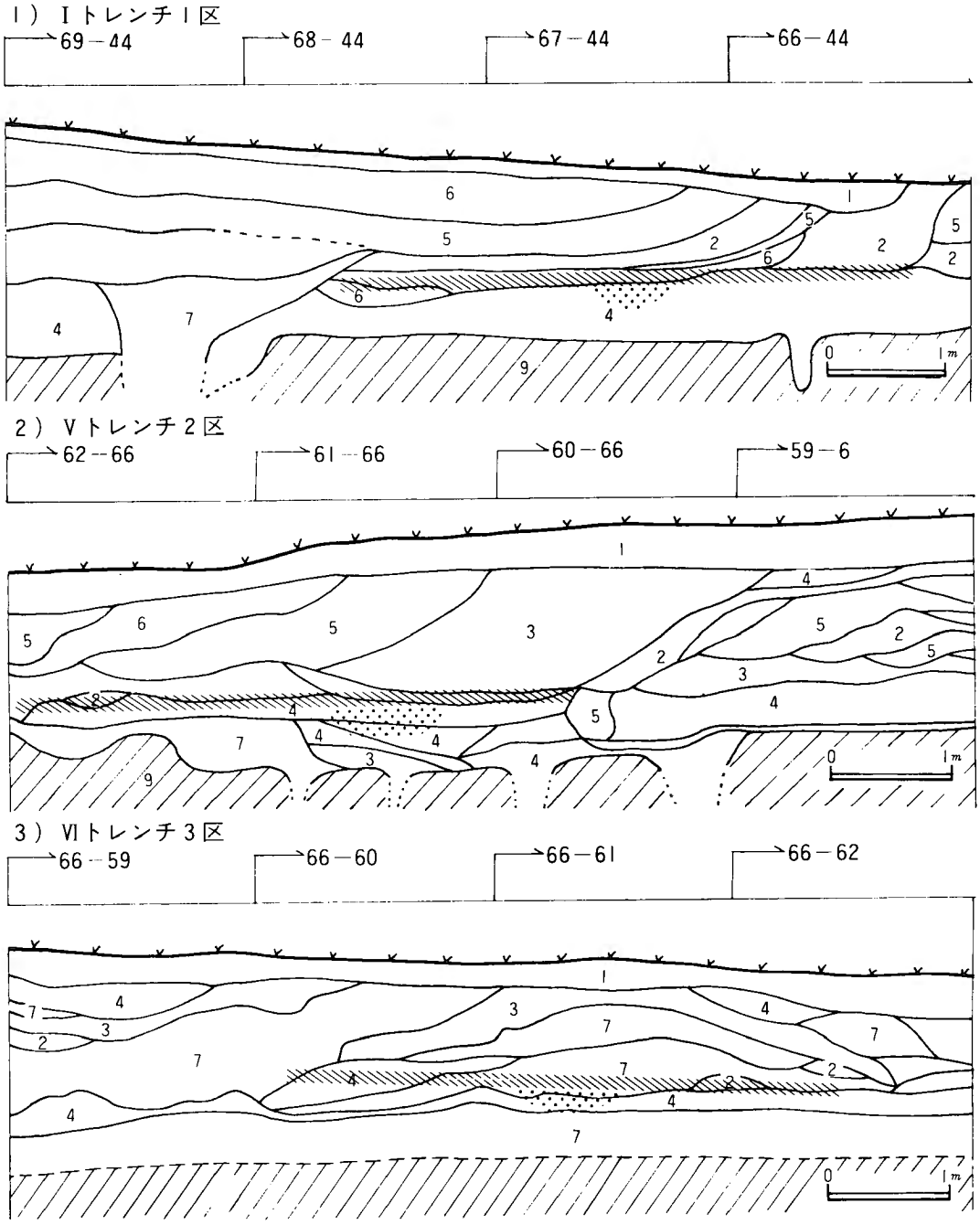
①　ＩＴ－１区より発見された炉跡（第１図１）

この付近の層序は、表土下にやや破砕されたキサゴを主体とする混土貝層が数枚と、黒色および黒褐色の薄い土層が南へ向って約20～30度の傾斜で交互に堆積している。そして地表下50～80cmでこれらの層はなぜか薄く消えてなくなり、一面に細かく破砕されたキサゴの層が現われる。この上面は、すべて踏みかためられたように堅くしまっており、私達はまるで竪穴住居址の床面を掘り出す時のように、この破砕された貝層の上面を容易にだすことができた。この踏みかためられた面の広がりは、かなり広範囲にわたっており、Ｉトレンチ１区北端より南へ向かって３グリッドにまたがっている。（第２図－１）

しかも本トレンチは馬蹄形貝塚をその中心に向ってほぼ直角に切っているため、南へ行く程に地表面は上昇するのであるが、それにもかかわらずこの面の広がりは、ほぼ水平を保っている。そしてなにより特筆すべきは、広がりを確めるためにこの面を追っていったところ、１区北端から２グリッドめの同面上に他の遺物と共に復原可能の浅鉢形土器（加曽利ＢⅢ式期）が正立して出土し、更に、３グリッドめから長径約80cmを計る楕円形プランの炉跡を発見したのである。炉跡の断面は中央部の厚さ約20cmの半月形状をなし、土層面上における炉跡と異なり、破砕貝層上面を掘り凹めて火を焚いているので、炉の内壁は貝が焼けて真赤になっており、この上に白い灰状になった貝粉が堆積していた。この灰の堆積量からみてもかなりの長期間このキサゴ面上において「炉」を中心にした何らかの生活活動があったことが推察される。

後日、同区内北端部と中央部との層位関係がつかめないので壁にそって切ってみたところ、この炉跡を有する破砕キサゴ層は厚いところで10cmほどのもので、下の混貝土層の上にまるで敷きつめたように帯状に薄く堆積しており、上面だけでなく層自体も堅くしまっており、一部下層に喰い込んでいることが判明した。この傾向は、あくまで炉跡周辺に顕著であり、炉跡から遠ざかり、層の切れめにいくにしたがって著しくなくなる。

また、層の上面および内部には骨角器片や土器片などがあり、遺物は多い。この層の下には前述の如くかなり厚い混貝土層があり、更に黒褐色土を経て褐色の地山へと達している。なお出土した土器片から、Ｉトレンチ１区北部における貝層形成時期は、炉を伴うキサゴ面が加曽利ＢⅢ式期、この面より上部に堆積するキサゴ主体の混土貝層と黒色および黒褐色土層は加曽利ＢⅢ～安行Ｉ式期、また炉跡面を有する破砕キサゴ層以下地山に



第2図　加曽利南貝塚における炉跡周辺の断面図

1 表土、2 純貝層、3 混土貝層、4 混貝土層
5 黒色土層、6 黒・暗褐色土層、7 黄褐色土層
8 ソフトローム、9 ハードローム

踏み固められた面

炉　　跡

達するまでの混貝土層と暗褐色土層はおもに堀之内Ⅰ式期の形成で、一部には加曽利BⅠ式期の堆積も考えられる。

② ＶＴ－２区より発見された炉跡（第１図２）

層序はまず、表土の下にキサゴを主体とする黒褐色混土貝層が厚く堆積し、その間にところどこ

ろブロック状に黒色または黒褐色の土層がかなりの急傾斜で入っており、非常に複雑な層位を呈している。（第2図2）

ところが、地表面下約1mに達するとこれから細かい層は消えてなくなり、一面に細かく破砕され、しかも上面が堅く踏みかためられたキサゴの貝層が出現する。このキサゴ層も厚さ10〜15cmで下の混貝土層上面に一部喰い込むような状態で乗っており、その分布はかなり広く、Vトレンチ2区南端より2グリッドにわたっている。そして、この「面」にも長径70〜80cm、中央部の厚さ20cmを計る平面プラン楕円形の炉跡があり、その内壁は真赤に焼け、内部には灰状になった貝粉が厚く堆積していた。ここでも長期間火を焚いた跡は歴然としていた。

この面直上における遺物の出土量はさほど多くなく、むしろこの面上に堆積する混土貝層下部から多量の遺物が発見されている。またVトレンチ2区における堆積層の時期は、表土以下問題の面まで、つまりキサゴ黒褐色混土貝層が後期後半の加曽利BⅡ・Ⅲ〜安行Ⅰ、そして面以下地山に至るキサゴ混土貝層が後期前半（堀之内Ⅰ主体）である。

③ ⅥT－3区より発見された炉跡（第1図3）

3例めはⅥトレンチ3区、60〜62グリッドの地表下100〜120cmより発見された。問題の面を有するのは、ハマグリを主体とする二枚貝の細かく破砕された貝層である。この上面も前2例同様に平坦で、しかも堅く踏みかためられた状況を呈していた。しかしながら、この面の広がりと、その基盤となる貝層については、1週間交替という調査期間の関係で私自身は実際に確認することができなかったが、調査担当時の現場状況では、かなりの広がりを有するものと思われた。

このグリッド周辺における層序は、地表から「面」を有する破砕された貝層との間までが非常に複雑で厚さ10〜30cm前後の混土貝層や混貝土層、土層などが何枚もかなりの傾斜をもって折り重なるように堆積していた。しかしここでもまたこれらの貝層群は踏みかためられた二枚貝の破砕貝層上面で消えてしまっている。そして、ちょうど私達が引きあげた次の週にこのグリッド内の破砕貝層上面より、径60〜50cmの楕円形プランを有し、深さ15cmを計る炉跡が発見された。この破砕貝層の時期は、加曽利BⅢ〜安行Ⅰ式期で、これより上は安行Ⅰ式土器が出土している。（第2図－3）

Ⅲ

以上、昭和39年に行なわれた加曽利南貝塚の調査により、貝層部中より発見された炉跡とその関連遺構と思われる破砕された貝層のあり方について思いつくままに書きとどめてみたが、その概略をまとめてみると次のようになる。

1）炉を中心とした生活面の層位的位置は、今、仮りに南貝塚の貝層部を形成する貝層群を㋑地山に沿って帯状堆積を示す貝塚形成の基盤ともなるべきグループと、㋺その上の貝塚の高まり部分を形成するブロック状堆積から成るグループとに2分すると、㋑の地山に近い貝層グループの上部付近に集中している。

2）この生活面の中心となる炉跡の形状は、いずれも楕円形を呈し、その規模は長径60〜90cm、深さ約15〜20cmを計る大型のもので、長期間火を焚いた跡が明確である。

3）炉の周辺に広がる生活面は、厚さ15〜20cmの破砕貝層からなり、二枚貝・キサゴいずれの場合も上面もしくは層自体が踏みかためられた形跡を有し、その範囲は大きなもので直径5〜6mにも達する。

4）この破砕貝層は、いずれもその下層のかなり厚い別の貝層を基盤としており、その上に故意に貝殻を敷きつめたような状況を呈し、一部は下層に喰い込んでいる。

5）この破砕貝層面上、もしくはその付近に遺物が集中するという傾向がある。

これらを総合すると、柱穴などのピット群が未確認な点を除けば住居跡内における床面と炉跡のような状態がまさしく、この破砕貝層上面においてとらえられたといってよいだろう。しかしながら、この炉跡を中心とした生活面については、その機能を裏づける具体的根拠に乏しく、残念ながら現在までのところではその性格については明らかでないと言わざるを得ない。

このような貝層中における生活面の発見は記録には残っていないが、当時の調査員からの伝聞によれば、昭和39年度の南貝塚調査だけでも10数例を挙げることが出来、実際には南貝塚内部にかな

第1表　加曽利南貝塚貝層中発見の炉跡一覧

位　　置	炉の規模	面を成す貝層と規模	面の時期	備　　考
VT－2区 (60G～62G)	直径70～80cm 厚さ　20cm	キサゴ破砕貝層 直径　4～5m 厚さ　10～15cm	堀之内　I	
IT－1区 (66G～68G)	直径70～90cm 厚さ　20cm	キサゴ破砕貝層 直径　5～6m 厚さ　10cm	加曽利BIII ～ 安　行　I	キサゴ破砕貝層上面に土器などの遺物多い
VT－3区 (60G～62G)	直径60～50cm 厚さ　15cm	二枚貝破砕貝層 直径　4～5m 厚さ　15cm	加曽利BIII ～ 安　行　I	二枚貝破砕貝層の直上層中に遺物多い

りの数が存在するものと予想される。

加曽利貝塚博物館の後藤和民氏からの御教示によれば、VT2区（第1図5）とVT1区（第1図4）においてはいずれも地表面下1.5mほどのソフトローム上にキサゴ破砕貝層を約2×15mの範囲に敷きつめ、その全面に焼土と灰とをまき散らしたような遺構（堀之内I式期）が発見されているとのことである。これは一部に炉跡の存在も認められたとのことであるが、この面の存在する位置が貝層下ソフトローム面上であり、前述の3例とは性格を異にするものと考えられる。

なお大宮守誠氏によれば（註1）、昭和9年の加曽利貝塚の調査によってA・B・E地点より合計4ケ所の焚火遺構が発見され、このA地点の2ケ所とB地点が地山に近い土層上にあり、E地点ではハマグリ貝層上に焼土が広がっていたという。同氏の報告によれば、まず、A地点のa・b焼土はいずれも平面プラン不整楕円形を呈し、その規模は長径60～80cmを計る。そして焼土面の状況は、「…厚さは共に五糎及び十糎で且つ不可思議な事には、共に焦土下部には一面にキサゴが五糎及至十糎の厚さを以て積まれ、恰も焦土の土台を形ち造ってるかの感がある。」とキサゴを敷きつめた上に焼土が充満していることを強調している。

またB地点発見のⓐ.ⓑ焼土についてはⓐ焼土面については「土質は粘土で、焦土はその粘土の中にキサゴを米粒大に粉砕した粉を混へている。」と記している。このA.B地点における焼土面の状況は、いずれも地山に近い土層面上にあり、薄いキサゴ層などを土台にしていたりする点で、先述の後藤氏の教示による2例と同様のものかと考えられる。

なお大宮守誠氏の報告中、E地点発見の焚火遺構については、「…地表下1米半許り下部ハマグリ層の表部に広がっていたもので前記の各焦土とは全くその性質が異なっており、地山面の焦土に対して面白い対象を示している。」と簡単に記されているに過ぎないが、その分布範囲は東西1.5m南北0.8m、厚さ5～10cmを計るという。おそらく、これが筆者が南貝塚の調査中に遭遇した貝層中発見の生活面を伴う炉跡と同種のものと思われる。

大宮守誠氏は、これらの焚火遺構の機能について貝層下発見のものについては、台湾のヤミ族の例をとり上げて土器焼成のための窯跡であろうと考察しているが、貝層中発見の1例についてはあくまで性格不明であるとし、鳥居龍蔵氏の「食糧品調理用焚火跡」説（註2）を以ってしても解決し難いと結んでいる。いずれにしても、大宮氏の報告例も含めてここに紹介した炉跡と生活面の性格については、現在まで同種遺構の報告例が少なく、今、ここで結論を出すのはあまりにも早急であると考えている。ここでは事実のみを述べるに止め、今後の研究と資料の増加に期待したい。

＜参考文献＞

〔註1〕大宮守誠　1937—6「千葉県加曽利古山貝塚に就いて」『考古学雑誌』27巻387頁

〔註2〕鳥居龍蔵　1924『武蔵野及び其有史以前』